

Web 版研究報告のスタートに当たって

教育の一層の充実を図るためには、何より教員の資質向上が不可欠であり、そのためには教員が常に問題意識を持ち、社会の要請に的確に応えられる、たゆまぬ進取・探求的な姿勢が求められます。

本校では、その成果を発表する場として、2009 年度から「くしろせんもん学校環境・教育研究センター研究紀要」に取り組み、今年 3 月で第 7 号発刊の運びとなりました。また、2018 年度には 2016～2018 年度 3 年間の実践をまとめた『幼児教育と「こども環境」－豊かな発達と保育の環境』（明石書店）を出版しました。

この度、年一度冊子として発信する「研究紀要」に加え、実践をその都度紹介していくことができるよう「Web 版くしろせんもん学校環境・教育研究センター研究報告」（本校ホームページ）をスタートすることにいたしました。

第 1 回目の報告は、本校 森田有紀子専任講師の『領域「言葉」から「国語」への接続を考える』です。今後、不定期になるかとは思いますが、非常勤講師も含め本校の取組を積極的に発信していきたいと考えております。

拙い内容かとは存じますが、少しでも皆様の授業づくりのお役に立つことができたら幸いです。お気づきの点や、ご助言等がございましたらお声かけをお願いいたします。

くしろせんもん学校 校長 杉村 典史



くしろせんもん学校

Title	領域「言葉」から教科「国語」への接続を考える
Author(s)	森田 有紀子
Citation	研究論文
Issue Date	2020-09-01
Doc URL	https://www.sakaseru.com/html/study.html
Right	
Type	Bulletin(article)
Additional Information	

くしろせんもん学校・令和2年度

領域「言葉」から教科「国語」への接続を考える

森田 有紀子

序：問題意識から

幼稚園・保育所修了後、小学校・新1年生が集団生活を送れない、授業中座ってられない、話を聞くことができない等の状態が続く現象が「小1プロブレム」として問題になり、幼・保と小学校間の接続の課題が論じられて久しい。

このような問題意識を踏まえて、幼稚園教育要領・保育所保育指針、また、小学校学習指導要領において、幼児期と児童期とを円滑に接続することが求められていることに、どのように応えていくのかについて考察したい。

筆者は、くしろせんもん学校での講義「保育内容の指導法(言葉)」に基づいて、理論的に指導法を概観するとともに(森田、2020a)、指導法の実践を明らかにしてきた(森田、2020b)。これに続く研究として本報告は、幼児教育の領域「言葉」と小学校「国語」に焦点を当て、幼・保と小学校間の課題を探究する。

[1]幼稚園教育要領に基づいて

幼稚園教育要領では「幼稚園教育において育みたい資質・能力及び“幼児期の終わりまでに育ってほしい姿”として次の項目が挙げられている。《幼稚園においては、生きる力の基礎を育むため・・・幼稚園教育の基本を踏まえ、次に掲げる資質・能力を一体的に育むよう努めるものとする。

① 豊かな体験を通じて、感じたり、気付いたり、分かったり、できるようになったりする「知識及び技能の基礎」

- ② 気付いたことや、できるようになったことなどを使い、考えたり、試したり、工夫したり、表現したりする「思考力，判断力，表現力等の基礎」
- ③ 心情、意欲、態度が育つ中で、よりよい生活を営もうとする「学びに向かう力、人間性等」》

幼児期の終わるまで育ってほしい姿として、10の姿を挙げている。その一つとしての「言葉」に関わる姿も挙げられている。「言葉による伝え合い」として、「先生や友達と心を通わせる中で、絵本や物語などに親しみながら、豊かな言葉や表現を身に付け、経験したことや考えたことなどを言葉で伝えたり、相手の話を注意して聞いたりし、言葉による伝え合いを楽しむようになる」ことが求められている。

保育内容の「言葉」は、5領域の4番目に位置づけられている。「言葉〔経験したことや考えたことなどを自分なりの言葉で表現し、相手の話す言葉を聞こうとする意欲や態度を育て、言葉に対する感覚や言葉で表現する力を養う。〕」

そこでの「ねらい」は、「①自分の気持ちを言葉で表現する楽しさを味わう。②人の言葉や話などをよく聞き、自分の経験したことや考えたことを話し、伝え合う喜びを味わう。③日常生活に必要な言葉が分かるようになるとともに、絵本や物語などに親しみ、言葉に対する感覚を豊かにし、先生や友達と心を通わせる。」

ここでは、基本的には自分の考えをまとめ、伝えるコミュニケーションが重視されている。

[2]幼児期と小学校低学年との接続の課題

(1)接続を考察する基本的視点

① 幼児期

前述した幼稚園教育において育みたい資質・能力を踏まえて、知識や

技能の基礎を重視する点を確認しておきたい。この[基礎]の土台を広げて考えたい。[基礎]の土台への接続という点で、非言語コミュニケーションも交えて、言葉以外での自分の気持ちを表現することにも着目しておきたい。

② 小学校低学年での接続

小学校までの接続で、低学年の入門段階での話す・聞く・伝え合うを踏まえて、感性・関心・意欲・体感等を重視する。その後の発展として、[基礎]の土台の広がりの中で、思考力・判断力・表現力としての思考することの意味や、表現と自己の思いとの擦り合わせ、そして言葉遊び、これらを踏まえての読書へと展開していくこととなる。

さらに、土台が広がった[基礎]を踏まえての、より高学年の教科等で扱われている知識等への発展へと繋いでいくこととなる。

(2) 知識や技能の[基礎]

(2-0) 基本的視点

コミュニケーションでは、自分の考えを整理し、人に伝える。

基本的にそのコミュニケーションの手段は言葉に限らず、目の発信・受信等もあるし、思いの表現は絵で表すこともある。コミュニケーションの一つの有力な手段として、幼児期から小学校低学年には言葉、文字がある。まずはこの基本を確認しておきたい。

ここでは、次の4つの点に着目して、幼児期から小学校低学年との接続課題を考えたい。

- ① 発達過程に即して、コミュニケーションの後述の各種位相に着目すること。
- ② 自分の思いや想いの表現が、コミュニケーションの基礎として土台に存在する。
- ③ そこでは必然的に、思いと表現とのズレが存在する。
- ④ そのズレも含めての表現の面白さ・楽しさもあり、遊びという要素がある。

各々についてみていこう。

(2-1) 発達過程に即して

音声や非言語コミュニケーションから言葉・文字までの各種位相がある。各々の位相が発達過程の3歳未満児・3歳以上児・小学校低学年に大まかに対応している。幼児期の[知識]より高次の段階での再構成は小学校・高学年で現れることとなる。

① 発達過程に即して

言葉に関しては、その[基礎]と、発達に即した位置づけが必要である。3歳未満児段階における非言語コミュニケーション等も位置付けられる。幼児期と小学校低学年のみならず、それ以前、さらにはその先へと発達においてとらえていく必要がある。

② 言葉・文字と人とのかかわりの生成期

言葉で切り取る前の段階では、思いや想いのイメージもある。それによって自己の考えや思い／想いを整理し、他者へ表現する・伝えるがある。

ここでは、表現の多様性に着目しておく必要がある。一つに限定されるものではなく、表現の広がりの中に位置づけておく必要がある。

③ 言葉・文字を介しての移行・接続期

言葉・文字においても、背景に思い・想いのイメージがある。言葉・文字表現へとなっていても、幼児期以前の段階から有りうる、思い・想いと表現とのズレが解消されるものではないことに着目しておく必要がある。

(2-2) 伝える意志からの思い・想いを大事にする。

先述した発達過程に応じた表現の位相は基礎的な土台の上に成立していくものであり、次の段階に移行したから、下の層が存在していないわけではない。

言葉・文字に関する表現においても、基礎的な土台が存在することを確認しておきたい。

小学校は、言葉・文字が優先する段階と考えられがちだが、そうではない。まずは伝える意志からの基礎として考えたい。

話す・聞く、それらを介しての自己・他者への伝達がある。そこには、思い・想いのイメージというコミュニケーションの原点が存在する。

学ぶ・マネルや目や動作・ボディランゲージから始まり、言葉・文字へと発達があるが、言葉・文字以外が不必要になったわけではなく、小学校低学年にも活きている。さらに言葉・文字へと発展していく契機がある。

(2-3) 思いと表現との間に、過渡期も存在する。

自分の思い／想いにおいて、気持ちはあるが、うまく言えないということが必然的にあるように、表現との差異・ズレがある。この表現の葛藤の過渡的段階を重視したい。そこに葛藤やズレがあるからこそ、表現が模索されることとなる。

言葉・文字として自分の考えを整理することや、他に伝える、それを介して自分を問い直すこと、さらには世界を言葉で表現することなどを行う。小学校では軸足が言葉・文字にもなるが、表現の葛藤・ズレはある。

その葛藤では向かい合いがある。葛藤やズレは回避するものではなく、その過程に触れず結果だけを評価することになると、過渡期を見落とすことになる。その過渡期を重視することは、発達の一つの原動力を考えることとなる。

幼児期でも同様のことがある。例えば自然観察において、まずは五感を利用しての展開を重視することと類似している。言葉に関しては、サイン・動作・ボディランゲージや五感の聞く・触れなどや目の表現と違いにはしばしばズレもある。指さしを経ての言葉表現においても、そこに至る過程をイメージ・思いを大事にする必要がある。

思い／想いと表現とのズレがあることから、その表現のプロセスを抜きにして知識を結果だけで重視すると、結果としての「知識」が脆弱なものとなる。この考え方は、全体に貫く視点となる。

(2-4) もう一つの重要な要素としてあそびへの着目

表現・ズレの模索過程において、多様性や異質な表現にあるように、自由な遊びを踏まえての探索の面白さ・自由性もある。特に幼児期からの言葉遊びとしての延長として現れる。これらは言葉遊びを中心とする絵本にも現れる。

遊びを介して、子どもは自分の持つイメージを自由に面白く楽しく解放する。遊びは表現を豊かに広げる可能性もある。

[3] 小学校国語教科書から

領域「言葉」からつながる小学校国語の教育内容を、本報告はK地区で採択されている光村図書の国語教科書を分析の対象とする。

(1) 互いの気持ちを伝えることから

『さあはじめよう　なんていおうかな』 1～2時間扱い
教材について

『さあはじめよう』は教科「国語」に踏み出す単元で、7つの教材によって様々な言語活動を学ぶ。そのうち「なんていおうかな」は教室で子どもと教師がお互いに頭を下げている場面、水の入ったバケツを持った女の子に友達が声をかけている場面など、挨拶や対話の場面が9つの

挿絵で表されている。

時	学習活動
1～ 2	<ul style="list-style-type: none">・挿絵を見ながら、同じような場面があるか想起する。 また、どのような場面なのか考える。 「いつ、誰が何をしているのだろう」 「帰るときに先生やお友達に挨拶している」 <ul style="list-style-type: none">・それぞれの場面にあった言葉や動作を考え、教師と友達に対しての言葉遣いの違いや、気持ちを伝える言葉を知る。 「先生にはさようならで、お友達にはバイバイと言うよ」 「遊んでいる2人のお友達の所に女の子が来た場面は「入れて」「いいよ」だと思う」 「「ありがとう」って言われたら嬉しいな」 <ul style="list-style-type: none">・それぞれの場面にあった言葉や動作を友達とやりとりをする。

これは領域「言葉」の「親しみをもって日常生活の挨拶をする」の続きとなる教材である。国語ではさらに、相手や場面によって挨拶の違いがあることに気づかせる。また、物の貸し借りや遊びに加わる等、子どもがよくある生活場面で自分の気持ちをどう伝えたら良いのか、どのような声掛けをしたらよいのか、実体験を元に伝え合う言葉について学ぶ。

(2)伝えるを踏まえての、話す・聞くの重要性

『さあはじめよう あつまってはなそう』1時間扱い
教材について

黒板に「すきなどうぶつ」の板書と犬、猫、ライオン、象、パンダのイラストが貼ってあり、それを大勢の子どもたちが二人組になって指をさしたり腕を組んだりしながら話し合っている様子が描かれてある。これも『さあはじめよう』の単元の中の教材の一つである。

時	学習活動
1	<ul style="list-style-type: none"> ・ 教師が提示した動物の絵を見て、好きな動物を一つ選ぶ。 「どれにしようかな。」 「二つあるけど一つに決めよう」 ・ 同じ動物を選んだ人で集まり、選んだ理由を伝え合う。 「犬はかわいいから」 「家で飼ってる犬は僕を見たら嬉しそうに寄ってくるから好き」 ・ 違う動物を選んだ人に理由を話したり、感想を言い合ったりする。 「象は大きくて乗ってみたいからです」 「私も乗ってみたいな」

子どもが比較的考えやすい「好きな動物」という話題に沿って、話し合いを行う学習である。幼児期の子どもと同じように、1年生の始めでは自分の興味があることについて話すのが好きで、相手に伝えたいという気持ちが強い。その一方で、相手の話を「聞く」ことに対しては「話す」ことより関心が薄い。ここでは、相手に伝えるだけでなく、幼児期から一歩進んで「話し手の話したいことを落とさないで聞く」ことも大きな目標となっている。聞いてもらうことがあって改めて「話す」意欲がまた芽生えていく。幼児期から続く「話す」楽しさをさらに深める。

(3) 想像を広げ、表現し伝える

『いいてんき』2時間扱い

教材について

小学校国語で初めて子どもが会う教材で、5つの絵で構成されている。最初のページには「いいてんき」という文、女性一人とリュックを背負った子どもたち。女性と子どもたちが後から来たと思われる子どもに向かって手をあげている場面。空、海、木、草、鳥、看板など。

2 つ目の場面は大きな丸太の橋を歩いたりしている様子。色とりどりのキノコがあり、乗っている子どももいるため、ファンタジー的要素が強いと気づく。

3 つ目の場面は虹と大きなきれいな色とりどりの魚が目に飛び込んでくる。魚が飛び込んだのか、大きな水しぶきが飛んでおり、それを見た子どもたちの様子が描かれている。

4 つ目には大きなピンク色のきのこに子どもたちが乗ってお弁当を食べていたり、雲にも乗ったり触ったりしている様子。

最後の場面では子どもたちが帰ってくる様子の絵に「いいてんき さあいこう ひろいせかいへ とびだそう わくわくするね たのしいね」という文章が添えられている。

時	学習活動
1	<ul style="list-style-type: none"> ・「いいてんき」から想像できることを出し合う。
2	<p>「晴れている」</p> <p>「遊びに行く」「水遊びしたいな」</p> <p>「幼稚園の時の運動会晴れていたよ」</p> <p>「わくわくするよね」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・挿絵を見て、見つけたものや誰が何をしているのか気づいたことを話す。 <p>「この女の人は先生だと思う」「ここにリスがいます」</p> <p>「おにぎり転がってるよ。『おむすびころりん』みたい」</p> <p>「ねずみもリュック背負っているね。どこに行くのかな」 ・絵の中の人物になりきって友達と話をする。 <p>「待ってえ」「おおい。こっちだよ」</p> <p>「おはよう」「楽しみだね」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・文を教師が読んだ後に続いて読み、声に出す。 </p>

カラフルで何かを見つけてお話ししたくなるような挿絵は、小学校国語の授業開きとして、ワクワクするような期待感が生まれる。動物、植

物、景色、子どもたちの様子などは、幼児期からの経験や体験を通して気づくことがあると考えられる。絵を見て想像し、言葉にして相手に伝える。

そして、お互いの話に関心をもって取り組むことを目標としている。

(4)遊びを要素を用いての言葉遊び

表現の面白さ・楽しさや多様な表現へ

『たのしいな ことばあそび』2時間扱い
教材について

最初のページには「あ」から始まる言葉「あり」「あしか」「あいさつ」の2～4文字の言葉、次ページには「い」「う」「か」の文字と「いるか」等、その文字から始まる言葉のイラストがヒントとして描かれてある。

時	学習活動
1	・教科書から「あ」から始まる言葉がいろいろあることを知る。
2	「しりとりみたいだね」 ・1音節1文字の仕組みを手を叩きながら理解する。 「あ・り」「文字の数と手を叩いた数が同じだね」 ・「あ」から始まる言葉を集める。 「2文字の言葉はあめ、あし・・・」 「3文字の言葉はあたま・・・」 「4文字の言葉はあおむし・・・」 ・「い」「う」「か」から始まる言葉を教科書の挿絵を見ながら、手を叩きながら確認する。 ・それぞれの音から始まる言葉を集める。 ・集めた言葉を友だちと交流する。

「言葉集め」という言葉遊びを通して言葉の興味・関心を高める単元であり、幼児期からの言葉遊び「しりとり」と同じように楽しみながら

学習を進めることができる。この学習によって、語句の量を増やし、語彙を豊かにすること、文字と音節の関係に気づくことをねらいとしている。

古くから親しまれている「ことばあそび」は、言葉のおもしろさを感じることができる。1年生では、「しりとり」「数え歌」「早口言葉」などの言葉遊びや、濁音や半濁音・拗音・長音など言葉の使い方を唱え歌によって学んでいく等、幼児期からの遊びを受けながら言葉の表現の面白さ・多様性に触れ、進んでいく。

幼児期での他の領域との関わりの中での活動や絵本など物語に触れること、言葉遊びは、言葉の関心や感覚を育むことができる。遊びの中の体験、正しい言葉の環境が小学校の学びに繋がっていく。

まとめ

幼児期や小学校低学年の接続から考えられる課題

幼児期と小学校低学年の接続から考えられる課題は下記の通りである。

- ・未満児から幼児・小学校低学年との発達の中で検討すること。
- ・伝える・話す等の重視を非言語コミュニケーションにおいてとらえること。
- ・自分の気持ちと表現とのズレがあり、それが発達の原動力の一つなる。
- ・低学年の特性としての「あそび」の要素への着目
- ・基礎的な【土台】の中で、【知識】は豊かになり文字・文章等の学習へと深まっていく。これらの課題は小・幼・保と小学校の接続だけでなく、広義の意味での言語教育(英語も含めて)の在り方にも示唆を示している。

今後も接続の課題を具体的な教科書等の事例に基づいて深めていきたい。

参考文献

- ・ 森田有紀子、2020a:「保育内容の指導法(言葉)-日常の保育実践につなげていくために」、くしろせんもん学校・環境・教育センター研究紀要、第七号、pp17～42
- ・ 森田有紀子、2020b:「保育内容の指導法(言葉)実践編」、前掲書, pp103～128